

【論文】

nLDK批判をめぐる諸理念・諸議論の系統的整理：後編 — 計画学のための基礎的考察 その3 —

江上 徹

The Methodical Arrangement of Ideas and Discussions Connected with Criticism of nLDK : the latter half — A Fundamental Study for Planning Theory Part 3 —

Toru EGAMI

Abstract- Criticism of nLDK increases in these days with relation to criticism of Architectural planning theory, but ideas connected with it are not understood correctly and discussions are not accumulated. So we aim at the methodical arrangement of ideas and discussions connected with criticism of nLDK. In this paper firstly we point out that symbolization and abstraction of the images of new housing ideas arose shortly after the proposition of these ideas. Secondly we explain that criticism of nLDK is composed of 4 factors, namely criticism connected with reception in a living room, criticism of uniformity, criticism of closedness and criticism connected with the changes of a family.

Keywords : *nLDK, an image of a house, symbolization and abstraction, uniformity, closedness*

1. はじめに

昨年(2005年)5月31日のNHK「生活ほっとモーニング」は、戦後60年目のメッセージとして、戦後日本の住居を省みる特別番組を放送したが、そのタイトルは「"3LDK"はもういらない」であった。ここに典型的に示されるように、nLDKに対する批判は今やマスメディアに浸透するほどの広がりを見せている。しかし他方では、nLDKに批判的な建築家でさえも、「やはり普通にはnLDKタイプが好まれます」と述懐するように、建築家の設計によるものも含めて、現在つくられている住居の多くはnLDKであるというパラドキシカルな実態がある。これは批判の対象でしかないかのようなnLDKなるものに潜む、ある種の普遍性、可能性を暗示しているとも解釈できる。批判とは本来、対象をトータルに批判するものではなく、そこに含まれる肯定的側面を救い出しつつ、その批判的再構成を目指すべきものであろう。しかし、前報でもふれたように、これまでのnLDK批判論議にはそうした性格は希薄であった。本論はこうした現状に鑑み、nLDK批判に関わる諸理念、諸議論を系統的に整理し、それを検討する中からこの批判の意義や限界、これからの住宅計画の課題について考えようとするものである。

2. 新しい住宅像の記号化、抽象化

前報で述べたように、戦後の住宅革新期における三つの住居理念、51C型、モダンリビング、公私室型ともに、その出発点においては具体的なレベルで生活を重視し、それに対応した空間構成を考えようとしていた。しかし小住宅であるが故に、その構成要素はある意味で限られている。また、公営住宅や公団住宅では大量供給というシステムの下で設計のレベルを確保するために、標準設計という方法をとっていた。その際、既述のように住戸の構成要素の中の主要室を記号化して表記するということが行われた。台所はK、ダイニングキッチンがDK、寝室となり得る部屋の数には数字があてられた。2寝室+ダイニングキッチンの場合は2DKという具合にである。

このような記号化は供給者の側からだけ生まれたのではない。住宅ジャーナリズムでモダンリビング論が華やかに展開され、計画学研究者の側から公私室型が提案されようとしていた頃、戦後の小住宅設計の限界を批判する論文が早くも現われ、その中でも小住宅のプランが記号で表現されている。「建築文化」1958年4月号に掲載された、伊藤ていじ・磯崎新・川上秀光による「小住宅設計ばんざい」の中でのことである。そこで磯崎らは次のように当時の小住宅設計についてまとめている。「なんだかんだ

と小住宅設計家たちはいうけれど、われわれが具体的にみせて頂いているプランは、複雑そうに見えるが、整理してみると実に単純な要素しかもっていない。図式的にかけば、 $L-B \times n$ である。Lはリビングルーム、Bはベッドルーム、nはベッドルームの数。二昔前ではこうした簡明な図式は成立しなかったであろう。ところが前にものべたように戦後のわが国の都市のなかには、1夫婦を核とする1世代家族が1世帯として広汎に成立しはじめていた。これらの家族構成を横桿として、小住宅プランL-B型は誕生しているとみてよいだろう。そして小住宅の具体的なプランニングは、このL-B関係を軸として、一定規模のなかでおさめ、それをそれぞれの敷地の特殊事情に応じてアレンジすることにつぎるといってよいだろう。……もうこうなるとは小住宅設計は建築設計などというほどのものではあるまい。

この論文は小住宅のプランニングだけを主題としたものではなく、戦後の住宅供給のあり方から土地問題やアーバンスプロールまでを含む幅広い問題意識に支えられたものである。そうした問題意識の下で当時の小住宅設計の状況を、オーナー層が下方に広がるという形で量的拡充をみせているととらえ、かつては前衛的であった革新的小住宅設計の意味を問い直し、それがじつは記号化できるほどに単純なものになっているのではないかと批判しているのである。

このような議論を受け、より大きな歴史的パースペクティブの中で近代住居そのものの一般解を $L+nB$ という記号でとらえたのが黒沢隆であった。彼は上述の磯崎等の論文のポイントを、「数学の公式のように $L+B \times n$ つまり $L+nB$ として、あらゆる住宅が類型化されてしまったのである。「寝食の分離」「就寝の分離」「家事労働の軽減」というあの三つのテーゼは、この短い記号 $L+nB$ というただそれだけのなかに見事に過不足なく盛り込まれているのである」とまとめた上で、「(彼等は)これを小住宅、日本の戦後の小住宅の特徴としてとらえたが、しかし、実はそれだけではなかった」とし、「 $L+nB$ という住宅の一般解(nに具体的な数字が入ることによって、現実の特定の住宅つまり特殊解になる)は実は、少なくとも西ヨーロッパとアメリカにおいてごく普通に見られる、一般的な住宅の一般解そのものなのである。あるいは、近代という時代をむかえた地域に共通する住宅の間取りの一般解だったのである。こうした拡がりのなかで、住宅像と生活像とを見つめていくと、近代住宅でもなく近代建築でもなく、「近代住居」といういい方は、あたかも可能である。その「近代住居」の、まさに一般解こそが $L+nB$ だった」と述べている(「住宅の逆説 第三

集」、1977年)。

ただ本稿での論述の主旨からははずれるが、黒沢の議論の焦点が実はその先にあったことについては一応ふれておかなければならないであろう。彼は近代住居の本質を、賃労働と基幹産業としての第二次産業、単婚家族における夫婦の一体性、私生活の場としての住居等としてとらえ、Lと夫婦寝室は対としてその機能を全うするものであり、子どもの部屋は「個室」ととらえられるものであるため、 $L+nB$ は $L+B+nCH$ (CHは子ども部屋)と表記されるべきであると説いた。そして、このような近代住居は早晚崩壊するものであり、その後には成立するものとして「個室群住居」を提起したのである。

このような、戦後の革新的住居を記号化してとらえる動きは、この章の冒頭で述べた日本住宅公団のような供給者や上に述べてきた建築家だけでなく、計画学の研究者の中にもあった。例えば前報でふれた鈴木成文他の「公団アパートにおける公私両空間の分化について」(1961年)の第一報には「公団住宅の標準設計は、その原則が食寝分離、就寝分離を軸とした「n-DK型」におかれている」と述べられている。また、1962年の「建築年報」所載の「公的住宅における住戸設計の現状」において鈴木成文は、「<nDK型>は今後のアパートの基本形たり得るであろうか」と書いている。つまり計画学者の側も戦後の新しい住宅像のプランを記号化してとらえていたのである。その基盤には、先述したように対象が小住宅、小規模住居であり、構成要素が少なく単純であるという事情があるだろう。又、公団等の公的住宅供給においては標準設計による大量建設という方法がとられたため、益々記号化された表現に結びつく可能性が高かった。私企業たる住宅産業においても類似の事情があったであろう。こうして今日普通に使われているnLDKという言葉が生まれる。

ただ、「51C」は呪縛か」シンポジウムでも鈴木成文が「nLDKという言葉がいつ発生したのか調べようと思ったのですが、調べようがないんですね」と発言し、それに対し布野修司が「nLDK家族」とい出したのは社会学者ではないでしょうか」と応じ、更に鈴木が「いや私は、直感的には、建築でこの言葉を使い出したように思うんです」と答えたように、nLDKという言い方がいつなされるようになったかについては不詳である。今回相当数の文献に当たったが、明らかにすることはできなかった。興味深いのは、例えば黒沢隆がnDKという言葉を使いながら、そのすぐそばでLが入ってくると $L+nB$ のような表現になる点である。「2DKあるいは3DKという、つまりnDKという公団型間取りは、だから、日本の貧しい土壌のなかで信じられない普及ぶりを

みせた。それは、まさにL+nBの日本版であり、ここ日本では、L+nBとnDKとは、全く同一のもの、具体的なある家をとあげれば、L+nBとnDKの両方のnには、ともに同じ数字がはいるところのものであった。(前掲「住宅の逆説 第三集」)等と書いているのである。黒沢の場合は上述のように、Lと夫婦寝室を一つの対としてとらえているため、そこに“+”を入れる気持ちは理解できる。しかし、この黒沢の文を多少強引に援用すれば、L+nBとnLDKとの間のニュアンスの違いを次のように解釈できるかも知れない。キーワードは“貧しさ”である。nLDKはL+nB以上に空間の構成要素のイメージが貧弱で、抽象化されているのではないかと思えるのである。

いずれにせよ、戦後の住宅革新の中で提起された新しい住居理念はこうして記号によって表現されるようになる。その基盤には上記のように、元々対象となる住居が小規模であるが故の構造の単純性があるだろう。しかし、記号化して表現されることによって空間像やその構成の原理はより抽象化され、パターン化されて理解される、伝えられることになったのではないかと考える。それがnLDKの画一性のひとつの要因になったのではないだろうか。次章ではそうした画一性への批判も含め、nLDKへの批判の内容、流れについて考えたい。

3. nLDK批判の流れ

前章で述べたように、“nLDK”という言葉がいつ誕生したのかは詳らかではない。しかしそれが、51C型やモダンリビング、公私室型に代表される戦後の新しい住宅像の記号化の中から生まれてきたのは確かである。それ故、ここでいうnLDK批判には当然51C型・DK型やモダンリビング、公私室型、或いはそれを構成する要素空間、即ちリビングルームや夫婦寝室、子ども部屋等への批判も含まれることとなる。

3-1 リビングルームでの接客と関連した批判

前報で述べたように、51C型ではその厳しい住戸規模条件から、住居の対社会性機能、対社会コミュニケーション即ち接客の場への配慮は全く希薄であった。公私室型においても、公は家族の集まり、だんらんや食事ととらえられ、接客を殆ど視野に入れない見方が一方であり、他方ではそれを接客も含むノン・プライベートな行為全般ないしその場ととらえる見方があった。モダンリビングの理念では基本的には、リビングルームでの接客をイメージしており、そこは家族のだんらん・くつろぎと接客とが行われる場であった。しかし、戦前の住宅改善運動

の中では“接客本位から家族本位への転換”が叫ばれたことに示されるように、従来の日本の住生活の伝統の中には、接客と家族生活を画然と分けるという観念、感性が根強くあった。戦争による極端な住宅事情の悪化やアメリカと結びついた戦後民主主義の文化の影響があったとはいえ、そうした住意識、住文化はそれほど簡単に払拭されるものではないだろう。

このように戦後に提起された新しい住居理念は総じて、接客・対社会コミュニケーションという面であまいさや弱点を持っていた。それ故、接客と関連した批判は相当に早くからなされている。例えば「モダン・リビング」43号(1963年10月号)で広瀬鎌二は次のように述べている。“リビングルームはすでに日本語として日常語になっているはずでありながら、住居の中でのリビングルームは、本来の機能を充分にはたしているでしょうか。わたくしたちが数多く拝見した新築住宅では、そこが寒々とした板の間にすぎない空間であったり、あるいはまた、引越荷物の集積場としていつまでも放置されていたりしていました。また、古くからの習慣で、団らんはもっぱら茶の間、ダイニング、もしくはダイニング・キッチンに任せ、居間は来客の応接として、普段は白いカバーをかけた椅子がしずまりかえっているといった情景も屡々見受けました。これでよいのでしょうか”。

或いは小能林宏城は「これからの居間のために」(「新建築」1965年1月号)の中で“いま、建築雑誌やその他に見かける住宅は、戦後の前向きの建築家たちが否定し乗り越えようとした、戦前の中廊下式とよばれるプランニングが復活しつつある。そして、かつての文化住宅の応接間に類似した、生活感や機能的効果の希薄なサロンの、ショールーム的な居間(リビングルームと呼ばれるのが一般的になった)と、建築家たちが忌みきらった茶の間が、息を吹き返している”と述べている。また吉田桂二も「家づくり」1973年1月号で“洋風の居間を使いこなすことに、日本人はまだ慣れていません。使いこなせないけれど、応接セットやピアノやステレオを置くための部屋はつくっておきたいという程度の必要性では残念です。むかしは、同じように、応接セットを置き、飾り棚を並べた洋間を応接間と呼んでいたものが、今は居間と呼ばれる……”と書いている。

1950年代からの住宅革新、戦後の新しい住居理念の展開が一段落し、高度経済成長期に入りそれらが普及していく時期に上記のような、“応接間然とした居間・リビングルーム”という批判が登場するのである。そして、この接客と関連したリビングルームへの批判はその後長く続き、いわばモダンリビ

ングや公私室型への批判の典型ととらえることもできるだろう。モダンリビングの旗手として自他ともに認めていた宮脇檀もくり返しくり返し、この接客絡みの批判を行っている。ベストセラーともなった「新・3LDKの家族学」(1982年)では「今の日本のリビングルームはほとんど使われていない部屋である。つまり応接間になっているわけだ」と書き、「モダン・リビング」67号(1990年)では「リビングルームは何するところか分からぬまま輸入され、家の中央のいちばんよい部屋を占め、お客様も通す部屋だということから、昔のお座敷だ、応接間だという理解のもとに客用の部屋になってしまった」と述べ、恐らく絶筆となったであろう1998年の「暮らしの手帖」の連載「住まうこと」の中でも、「せっかく作った家の中で一番良い部屋、だからそこに客を通す部屋。となれば家中の立派なもの全部を並べ立て、ステイタスを表現しなくては、昔そんな部屋があったなあ——そうだお座敷だ——ということで、綺麗な洋風お座敷としてリビングという形が定着しはじめる。……かくして、形だけアメリカを真似しながら死んでいるリビングルームを持った戸建て住宅が、日本の郊外を埋めつくすことになったのだが……」と述べている。この三例に限らず、宮脇檀は同様の発言を色々な所で行っている。

こうした接客絡みの批判は建築家だけでなく、計画学研究者も行っている。扇田信は「住生活学」(1978年)で「こうして大概のリビングルームには、申し合わせたように応接セットが置かれている。しかしまず第1に、応接セットは文字通り接客的设备である。はりきって上等なものを求めるほど、子供などに腰かけたり跳びはねさせたりするのは惜しくなる。また家族が使うためだと力んでみても、団らんという行為は、終始、この会話用設備にふかぶかと腰かけて談笑する類のものではない。いろいろなことをするのである。第2には、空間上の問題がある。6畳あるいは8畳の和室単位の部屋に、豪華な4点あるいは6点セットがもちこまれたときに、デパートの広々としたフロアに並べられていたセットが、いかに場をとる代物であるかが初めてわかる。その他にピアノも、ステレオも、テレビも、飾り棚もあるということになれば、リビングルームには応接セットの間の隙間しか残らないということになる。そこではもう着座した静止の生活しかありえない。すなわちリビングルームは完全に客室化してしまうわけである」と書いている。人間工学の研究者である小原二郎も「インテリアの計画と設計」(1986年)の中で「これについては、いくつかの問題点が指摘されている。例えば、L(居間)は接客空間としての機能を併せ持ったものであるため、本当のくつろ

ぎの場になり得ていないこと……中略……団らんの場は本来内輪の肩の張らない空間であるべきなのに、接客という表舞台の機能も付け加えられてしまったという矛盾がある」と説明している。

こうした批判は女性の建築家や研究者からもなされている。山田初江は「居間の家族学」(1984年)の中で「私はいまの居間の在り方に疑問を持っている。それは家族の団らんの場であるといわれながら、そこへ客を招き入れることが意識されているせいで、実は家族が心もからだも本当にのんびりと楽にできる空間になっていないのではないだろうか。生活が豊かになってきた現在、かえって居間には高価で立派なソファや椅子が置かれ、くつろぎの空間からは離れていつている気がする。客を迎え入れることを想定しているからだろうか」と述べているし、林知子等は「住まい方から住空間をデザインする」(1989年)において、「家族のコミュニケーションの場としてつくられた居間も、実際には接客を意識した構えになりがちで、家族の日常生活にとって、居心地のよい空間となっていない例は多く見受けられる。……中略……居間は飾り物となって使われていないという場合も出てくる」と批判している。

以上に多様な例を長々と引用してきたことに示されるように、接客と関連したリビングルームへの批判はまさに枚挙に暇がないと言ってよいほどである。そしてこのようなリビングルーム=Lへの批判は、それを生み出してきた(ととらえられる)モダンリビングや公私室型といった理念への批判にもつながる。Lでの接客絡みの批判がこれほどまでになされる背景には、初めに述べたように、やむを得ない面があったとはいえ、戦後の新しい住居理念が先ず第一に51C型にみられるように接客・対社会コミュニケーションを殆ど考慮に入れていなかったこと、第二に、モダンリビングや西山卯三のいう公私室型のように、Lを家族だんらんも接客も行う部屋とする理解がある一方で、公を家族の集まり・だんらん・くつろぎとする理解もあるという理念上のあいまいさがあったこと、そして第三に、現実につくられ供給されたリビングルームの多くは規模等の点で家族のだんらんも接客も行う空間としては不十分であったこと、があると考えられる。このような問題に対しては、その後、鈴木成文・初見学らによる二公室型・デュアルリビングの提案や、江上による多目的空間としての居間の計画に関する提案等があるが、現実の空間の問題としては依然として十分な解決をみえない。

3-2 画一性・固定性への批判

既に「新しい住宅像の記号化、抽象化」の章で述

べたように、nLDKにつながる小住宅はその構成要素が限られており、公的住宅においては標準設計という方法が採用されたこともあって、磯崎新等が指摘したように類型化、図式化し易いものであった。また、戸数主義的住宅政策の下では住宅供給条件の改善の幅は小さく、更に日本人の住居観のあいまいさや受動性、保守性もあり、画一性や固定性への批判は生まれるべくして生まれたと言えよう。

「マイホームプラン」1993年7月号の「裸の住宅へ」の中で塩田能也は、“こうして、先鋭的な観念の先行と現実面での反動の結果もたらされた妥協の産物としての中途半端な住居形式は、「住まう」ということに対する主義・主張のなさから、「そういうものだ」として何となく受け入れられ、与えられたものに合わせて生活してしまうという、ほとんど無関心とも思える意識も手伝って、その形式を固定化させていきます”と書いている。この、戦後の住居について書かれたかのような文章は、実は大正から昭和の戦前期にかけての住宅改善運動の頃の住宅について述べられたものなのである。ここには日本の一般市民の住居観や住居・住生活の保守性、受動性の根深さがみてとれよう。塩田は、戦後の住宅についても“そもそも、大量の住居をできるだけ安く供給しようとする住宅公団と生産性を追求するプレハブメーカーとによって作られた住居形式が、規格化・固定化に進むことは、その趣旨からいって当然の帰結といえます。この形式は、OLDKあるいはL+OBという形で表記される現在の住居形式につながっていくわけですが、こうして提供される住居のあり方は、能率性と合理性を第一義とする小住宅設計理論によるものであり、そこには「住む」ということに対する理念の追求を見てとることはできません”と書いている。

画一性・固定性への批判は既に1970年代半ばには現われている。それも戦後の住宅革新の一翼を担ってきた「モダン・リビング」誌においてである。同誌の1975年夏号に建築家の山崎健一（宮脇檀建築研究所）は、“……昨今の住宅雑誌を賑わしているいわゆるモダンリビングスタイルのすまいの内にはそんなパズルの結果建てられたのではないかと思われる住宅に出会うのである。……生活内容の違いやすまいのスケールの違い、環境の違いなどを無視してか気付かないでか、カッコいいのでその当時のアメリカ現代住宅が手本にされ、試行錯誤しているうちにいつしかモダンリビングの主流を占めるスタイルとして定型化した”と述べている。この“定型化”という言葉もよく用いられる批判用語である。山崎の師匠である宮脇檀も「ハウプラン」1978年1月号の「リビングルームって何だろうーそ

の1」において、“あまりだれも座らないビニールレザーの二人がけのソファと向き合った2本の椅子、間の卓子とそれぞれの椅子の背には少し黄ばんだ白いレース編みがかけてある。卓上にはどこかの結婚式かなにかでもらったカットグラスふうの卓上ライターと灰皿……”とリビングルームの様子を細々と描き、それに続けて“平均的な日本の住まいの居間の実態はこんなところである。ぼく自身のいくつかの住宅地調査でもそれは証明されている。居間とは例外なくこうだった”との画一性を嘆いている。また、「ニューハウス」1984年1月号では、“型にはまったスタイルのリビングルームは結局のところ使われなくなってしまう”と警告している。

この宮脇檀の描写の対象となっているソファセット等の家具配置も画一性や接客絡みの批判の対象であった。例えば住宅評論家の藤井和子は「住宅画報」1979年2月号で、“必ずリビングセットが置かれているということ。しかもそのリビングセットが、場所をとる重厚な皮張りのものだったりすると、そこはまるで改まった応接室ということになってしまいます”と述べている。1980年代に入っても画一性への批判は続けられている。建築家の村田靖夫は「モダン・リビング」1984年特別号で、“どこの住宅展示場に行っても、どのモデルプランも、この3LDK+S、判で押したように、似た家族構成を想定している。モデルプランというのは、標準を想定して作るものだから、当たり前といえば当たり前なのだが、見る方は飽きる。いや、飽きるほどに、定型化したプランばかりを見せつけられることに少し苛立つこともある”と怒りを表明している。

1990年代になって“nLDK”という言葉が使われ出すと、この画一性への批判はそれまでも増して強くなったように思える。その急先鋒の一人が社会学者の上野千鶴子である。上野は「住宅金融月報」1993年8月号で、“日本の住宅は、1950年代の集合住宅の登場以来、nLDKの規格に固定されている。戸建てのフロアプランも、集合住宅と同じ規格を踏襲し、nLDKで個性がない”と述べ、「GA Japan」35号（1998年）では、“不況だというのに、新聞には毎日、おびただしい住宅広告が入ってくる。その間取りはハンで擦したようにワンパターンである”と批判している。隈研吾は「Esquire」1999年12月号で、もう少し広い視点から画一化をとらえている（「21世紀、住宅は進化する」）。そこで彼は20世紀には“世界中いたるところに標準的な郊外住宅が大量供給され、その度合はとりわけ日本で激しかった”とし、“大企業好きという日本人の病いが昂じて、住宅をことごとく画一化、規格化し、ついにはプレハブ住宅という世界に例がないシステムまで発明した”と

とらえている。当の住宅産業の側でも画一性については自覚されていたようである。積水ハウス総合住宅研究所長の佐治郁夫は「2050年 住宅産業の旅」（「西山文庫レター」19号、2003年）で、「60年代のキカク型は、「画一的」「お定まりの」という意味であったが、70年代のキカク型は「スタイルやプランは限定されているが」むしろこの短所を逆手にとって「新鮮なコンセプトやデザインスタイルも完成度を高く」して、無個性なイーgerオーダー型にはない強烈なインパクトと魅力を売り物にしていた。しかし、80年代になると、各社とも類似のコンセプトやスタイルの商品化住宅があふれてしまい、商品としての独自性を発揮するのが困難になってしまった」と業界の歴史を省みている。

1950年代初頭から60年代初頭にかけて、51C型やモダンリビング、公私室型といった新しい住居理念が掲げられ、その普及版ともいべき小住宅が60年代から70年代にかけて都市の住宅の中に広がっていった。先に紹介した山崎健一の批判はその1970年代半ばのものであるが、その頃から今日まで、nLDKないしそれにつながる住居やリビングルームの画一性への批判はずっと続いている。その主たる対象はプラン・間取りであるが、上述のように家具配置等にまで拡張されることもある。1980年代半ばから90年代初頭のバブル経済の頃に高まった多様化・多様性論を経、90年代半ば以降は戦後的標準の揺らぎないし崩壊があり、nLDKの画一性への批判は益々高まった。脱nLDKの住まいづくりが個人住宅だけでなく、公的集合住宅でも目指され、nLDKの呪縛を解くべくシンポジウムが行われたりするのである。

しかし一方で、例えば建築家の西沢立衛が「とにかくnLDKというのは、今まで数え切れないくらいの大量の住宅が建ってきて、そのほとんど全てが、木造とかRC造とかを問わず、豪邸か小住宅かを問わずに、どれもだいたいnLDK平面になっているでしょう。住宅建築のジャンルで、あれほど流通した住宅平面をほかには見つけられないんじゃないかと思うくらいに強烈な存在だと思うんです」（「10+1」18号、1999年）と述懐するような現実もある。確かに多くの人が批判しているような画一性・固定性や定型化があるだろうが、そのような性格を持った、nLDKという言葉でとらえられる住空間の型が広く受け容れているというのも一方で事実である。この受容が既に限界に達しており、今後全く違った空間型に変わらざるを得ないという見方もあり得るが、ここまで永く受容されてきた背景には何かがあるのではないかという見方も可能であろう。この辺りを見定める上でも、ここで批判の対象となっている画一性等についてより具体的な分析を試みる必要

があるだろう。

3-3 閉鎖性への批判

戦後の住居の閉鎖性を正面切って批判したのは鈴木成文の「住居の閉鎖化」（「建築雑誌」1984年4月号）が最初であろう。そこで彼は「建築計画学の側面として、現代史を語るという役割がある。建築と生活に関する今日の動向を明らかにし、問題点を指摘し、そして今後の方向を示唆するという役割である。とくに住居や学校建築の研究などにその性格が強い。この観点から今日の住居の動向を見ると、「閉鎖性が強まっている」ことを指摘できる。住戸の内においては個室への分化が進んで家族生活の統合が失われつつあり、一方、外に対しては玄関や開口部の閉鎖性が強まって一戸一戸の殻に閉じこもり、近隣や社会に対する連帯性が失われつつあるとあってよからう」と述べている。そして子ども部屋を主軸とした個室への分化やリビングルームでの接客の問題、かつての土間や縁側といった近隣に開かれていた空間の喪失、玄関ドアの閉鎖性、住戸まわり空間を含めた内外関係のあり方の問題等を指摘している。鈴木は「建築雑誌」1990年8月号の「集合住宅の生活と間取り」でもほぼ同様の閉鎖性への指摘を行っており、この住居の閉鎖化ないし閉鎖性に対する問題意識は今日まで維持されている。

鈴木が1984年に上記のような文章を書いたのはむしろ彼の長い調査研究の蓄積故ではあろうが、その少し前からなされていた子ども部屋（の閉鎖性）への批判があったことも見逃がせない。この1980年代前半には反子ども部屋キャンペーンとでも称してよいほどに子ども部屋への批判・否定が広がった。そのひとつのきっかけをつくったのは「文芸春秋」1982年4月号に掲載された松田妙子の「家をつくって子を失う」であり、もうひとつは「子供に個室はいらない」というサブタイトルを持つ宮脇檀の「新・3LDKの家族学」（1982年）である。後者は建築家が書いた本としては珍らしくベストセラーになり、その後文庫本化もされた。松田妙子の文にも1500通を超える手紙が届けられたという。先に引用した鈴木成文の文章の中にも「個室への分化が進んで家族生活の統合が失われつつ」あることが指摘されているが、松田、宮脇両氏が危惧したのもまさに子どもの個室の普及と家族間コミュニケーションの不全の問題であった。

松田妙子の一文が契機となって「住まい文化キャンペーン推進委員会」が1983年に発足し、「住まい文化に関する基本調査」が行われ、その結果は新聞等で大々的に報じられた。それは概ね「子供部屋が普及したことで、親と子供とのコミュニケーションが

なくなり、親子不和・断絶が起きている。」(松田妙子著「家をつくって子を失う」、住宅産業研修財団、1998年)といった内容であった。「住生活」1984年1月号にはこの調査や「住まい文化」論文・作文コンクール等と関連した「住まい文化シンポジウム(1983年11月21日開催)の様子が掲載されているが、そこでパネリストの一人であった大宅映子は、「私は、戦後の住宅産業が与えた二大罪は、子供部屋と使わない応接セットだと思っています」と語っている。宮脇檀も前掲書で、親は勉強部屋として子どもに部屋を与えており、「そのために子供が勉強部屋に入っていくことをどちらかという歓迎するし、子供の方ではそれを利用して、勉強もしていないのに子供部屋に閉じ籠もって親から逃げるといった逃げ方もある。だからいちばんの問題はそれによって家族の会話が消えてしまったことだろう」と書いている。

1980年代末からは10代の子ども達が犯す凶悪な犯罪がマスメディアで大きく報道されるようになり、子供部屋の問題は住居の閉鎖化の中で中心的な位置を占めるようになる。それは住宅や建築の専門誌だけでなく、週刊誌等でもとりあげられるようになった。例えば「AERA」1997年12月1日号は「子供を救う子供部屋のつくり方」という特集を組んでいるが、このタイトルの下には「開放的な間取りで親子の対話を促そう——「最近、うちの子部屋に閉じこもって出て来ないなあ」思春期の子を持つ親は神戸の事件に動揺している。親子関係を育む「家」の持つ意味は思った以上に大きい」というキャプションが付けられている。又、「サンデー毎日」1999年7月11日号の表紙には「住宅LDKタイプが、家族を引き裂く」という大きな文字が躍っている。同タイトルの記事の中では松田妙子が、1989年に起きた「女子高生コンクリート詰め殺人事件」に言及する形で、「しかし、その事件後も個室の子供部屋は日本の大多数の家庭に設けられていますね。そのうち神戸でも少年による凶悪事件が発生して、世間を騒がせた。親たちは「そんな事件は特異なケース」と思いたいでしょうが、ごく普通の家庭の、普通の子供が少年非行に走る割合が年を追って増加している現実を、もっと真剣に受け止めてほしい」と語っている。

近年では、こうした事件との関連で子供部屋や住居のプランを問題としてとりあげる著作も現われている。建築家の横山彰人著の「子供をゆがませる間取り」(2001年)の第1章は「子供の狂気はこうして育てられた!」と題され、1988年に連続幼女誘拐殺人事件を起こした宮崎勤や前記女子高生コンクリート詰め殺人事件の主犯格少年を始めとして、6つ

の事件、6人の少年を対象に間取り等との関連の分析にあてられている。確かに住空間は長期間の使用を通して、そこで生活する人間の人格にも影響を及ぼすであろう。ただ、子ども達が事件を起こす背景は様々であり、空間のあり方が事件の直接的原因となることは殆ど考えられず、短絡的な扱いには十分注意を払わなければならない。1980年代前半の反子ども部屋キャンペーンの際にも幾人かの建築家や研究者は、逆に子ども部屋を擁護する論陣を張った。例えば黒川哲郎は「家づくり」1983年10月号の「子供部屋、昨今」で、「最近の、子供部屋を有害ときめつける教育論議にしても、その建築版ともいえる「子供部屋無用論」にしても、こうした人格に対しての視点や集団生活との対応関係がないのがどうも気になる。さらに、こうした論議にとりまぎれて、住まいの絶対面積を拡げる流れを止めることに利用される懸念もあるし、住まいの中のスペースの多様性を見出す努力も、見失われていくような気がしてならない」と当時の趨勢に疑問を呈している。また、北浦かほるは「住生活」1984年4月号の「子供部屋は不要か」において、住まい文化キャンペーン推進委員会の分析自体に首をかしげ、その主張の根底には「都市型のプライバシー尊重に対する批判と、核家族化に伴う母子密着型家族関係の肯定があるように思われる。それが子供部屋不要論という形であらわれたのではないだろうか」とし、自らの実験や調査データを用いて子ども部屋のあり方、与え方や意味について論じている。このような冷静な態度こそが必要であろう。

子ども部屋の閉鎖性が批判された背景には前掲の幾つかの引用文に示されるように、家族間のコミュニケーション不全の問題がある。子ども部屋、子どもの個室があることが、それを与えたことが家族のディスコミュニケーションにつながっていると解釈され、それが非行にもつながると論じられるのである。実は上述の子どもの事件同様、家族間のディスコミュニケーションの要因としては子ども部屋等の空間だけでなく、様々なことがあるはずである。むしろ空間それ自体は主要因になっていない可能性がある。鈴木成文の批判でとりあげられていた、対社会という観点での住居の閉鎖性の要因も恐らく空間的な問題だけではないであろう。1980年代前半の子ども部屋批判が「住文化」という言葉を用いていたのはその意味では適切であったように思う。フィジカルな空間だけではない、より広い視野から住居の問題を見ようというのが「住文化」という視点に他ならないからである。住居内の個室化による閉鎖性だけではなく、対社会という面での閉鎖化の問題も含め、それは依然としてnLDKに存在しているが、

それへのアプローチは住文化も含めた幅広いものであるべきだろう。

3-4 家族との関係からの批判

近年、住居と家族の関係について論じる著作が多く出版されている。前節であげた横山彰人の「子供をゆがませる間取り」もそのひとつである。彼はその後に子供だけではなく、家族全体と住まいの関係を主題にした「危ない間取り」(2004年)を出版した。建築の専門家が書いたものとしてはこの他に、「個室群住居」(黒沢隆著、1997年)や「孤の集住体」(渡辺真理・木下庸子、1998年)、「変わる家族と変わる住まい」(篠原聡子・大橋寿美子・小泉雅生他著、2002年)等がある。

文学者や社会学者が書いたものとしては「借家と持ち家の文学史」(西川祐子著、1998年)や「住まいと家族をめぐる物語」(西川祐子著、2004年)、「家族を容れるハコ 家族を超えるハコ」(上野千鶴子著、2002年)等がある。上野はこの本の中で、「以前は住宅については建築家が、家族については社会学者や文学者が考え、両者には接点がありませんでした。しかし、建築家のなかに「いったい自分がつくったハコの中に誰が入り、どのように使われているのか」ということに関心を持つ人たちがあらわれ、一方で、社会学や文学のほうから住宅にアプローチしていこうとする動きが出てきました。「家族から住宅を見る」「住宅から家族を見る」その両方からのアプローチの越境がいま、はじまっているのです」と書いている。「51C」は呪縛か」シンポジウムをまとめた「51C」 家族を容れるハコの戦後と現在」(2004年)は正にこのような両方からのアプローチの越境の賜物であろう。文「学者」ならぬ小説家もこの住居と家族の関係についての本を書いている。芥川賞作家の藤原智美は「家をつくる」ということ(1997年)で、家をつくるということが実は家族をつくること、作り直すことでもあるのだと主張し、次の著書「家族を「する」家」(2000年)では、今や家族は積極的に家族をする必要性に迫られていると述べている。そして2002年10月から11月にかけては、「NHK人間講座」で「住まいから家族をみる」という8回の講義を行った。

このように家族と住居が関心を集めるようになった背景には、「閉鎖性への批判」の項でもふれた子ども、若者による凶悪な事件の発生に端的に表われている家族関係の希薄化や病理現象があり、また「個人化」等の言葉に示される家族の在り方自体の変化がある。このような状況を基盤に家族との関係からnLDKを批判する論議も盛んになった。「建築雑誌」1995年4月号は「ゆらぎの中の家族とnLDK —

戦後日本の家族と住宅」という特集を組んでいる。その主旨を説明する文では、「今、家族のあり方は揺れている、という。個人化する家族、逆噴射家族、漂流する家族、ホテル家族、薄家族、夫婦別姓、ポストモダン・ファミリー、・・・といった様々な言葉が用いられだしていることが、そのゆらぎを示している」と、先ず家族の病理現象や変化についてふれられ、その後に「日本的「近代家族」のモデルが一般化する中で、nLDKは成立し得た。逆に、nLDK家族モデルが定着してきたのが戦後日本である。家族のあり方が揺らいでいくとしたら、住宅はどう変わっていくのか」と問うている。

この特集で興味深いのは、幾つかの座談会において、宮脇檀や渡辺武信といったモダンリビングを率いてきた世代と山本理顕や隈研吾らのより若い世代とではnLDKへの評価が微妙に違っている点である。また、宮脇檀はこの時点でもnLDKではなく「L+nB」という言葉を使っている。宮脇、渡辺両氏は単純にnLDKを否定し去るという態度に疑問を呈しているのに対し、山本理顕は「nLDKという幻想が持っていた「住宅=家族」単位をまずどこかで変えざるを得ない」と旨語っている。nLDKは幻想としてとらえられているのである。その後、日本建築学会の建築計画委員会は1999年に「家族・個人・社会と住まい」というパネルディスカッションを開催しているが、その趣旨説明には「ここでは、個々の住まいの提案を、社会的な文脈 — 家族の変質、地域社会の変質やライフスタイルの未来、nLDKからの脱却など — の中に乗せて、論じる」と書かれており、nLDKへの否定の姿勢は一層強まっている。

こうした家族との関連でnLDK批判を強く推し進めてきた一人として上野千鶴子をあげることができよう。前掲の「家族を容れるハコ 家族を超えるハコ」の第1章は「nLDKの崩壊 — 住宅からみた家族論」と題されている。先述の建築家や社会学者、文学者が各々の領域を越境して住宅と家族にアプローチするようになった背景についてはプロローグで、「ここにある考え方の基本は、住宅という「ハコ」と家族という「現実」がどうやらズレてきているらしい、という現状認識です。「住宅に、想定どおりの家族がおさまっているわけではなさそうだ」というズレに気がついたから、こういう関心が出てきたのでしょ」と述べられている。それに続けて次のように上野は書いている。「住宅メーカーがつくる住宅も、前衛的といわれる建築家がつくる住宅も基本は同じ。素材やデザインのユニークさはあっても、結局のところは「nLDK」で成り立ってきました。nは家族数から1を引いた数で個室の数を表わします。nLDKとは夫婦の寝室と子どもの数の個室+共有ス

ペースのことです。このnLDKの基本プランが完成したのは1951年、公団住宅の51C型でのことです。また第1章では、“思えば戦後の住宅建築史は、食寝分離からはじまって、夫婦寝室と子どもの寝室とを分離するための長い道程であった。nLDKは、その戦後家族の理想を実現した究極のモデルであり、1950年代に完成して以来、いまだに耐用年数を保っている”とも書かれている。更に「GA Japan」35号（1998年）では、“住宅が市場へと差し出された商品である以上、そして市場が住み替えのリサイクルを前提にしている以上、住宅の標準化はやむえないのかもしれない。が、ここには標準化だけではなく、このハコのなかにはどんな家族が住むべきかについての、家族についての規範がある。それはパパ、ママ、ボクとわたしからなる近代家族という規範である”と述べている。

“ハコ”という表現はともかく、住空間あるいはその型とそこに住む家族ないしその型がズレてきているのではないかという現状認識はよいとして、あとの認識には相当に粗いところがあるのではないだろうか。その粗っぽさは1951年度の公営住宅標準設計であった51C型を“公団住宅”とした所などにも表われているし、それをnLDKの基本プランの完成ととらえる認識も緻密さ、慎重さに欠けている。51C型のような食寝分離、就寝分離を主目標とした住居理念と、リビングルームを持った公私室型やL+nBというモダンリビングの住居理念とは既に述べたように異なるものである。更に、このnLDKには近代家族が住むべきであるという規範があったというのである。51C型、モダンリビング、公私室型が提案された頃には恐らく近代家族なる言葉や概念はなかったであろうし、前報で述べたように、そこでは食寝分離、就寝分離、公私分離即ち私室や居間形成要求への対応といった、具体的な住生活への対応が考えられていたのであって、上記のような規範が主張されたのではない。抽象的近代家族なるものを容れるべき抽象的なハコとして、51C型やモダンリビング、公私室型が提案されたのではない。

確かに家族は大きく変化してきており、nLDKと称されている現実の住空間との間に矛盾、齟齬があるのも事実だろう。ただ、上野の批判に代表される、抽象的な家族概念に抽象的なハコ概念たるnLDKをぶつけるやり方は、単純にnLDKを全面的に否定していくという方向に向かいがちである。そうではなく、51C型やモダンリビング、公私室型が提案された時代と同じように、具体的に家族や生活を認識し、空間との関係を具体的に追っていく中から、現状のnLDKを批判するという方向が目指されるべきではないだろうか。

4. まとめ

51C型やモダンリビング、公私室型といった戦後の新しい住居理念は、食寝分離、就寝分離や公私分離の言葉に端的に示されるように、各々、住生活と住空間の対応を具体的に考え、検討する中から生まれてきたものである。ただ、第一に敗戦による資材不足や経済力低下などのフィジカルな条件の厳しさ、第二に戦前的なものへの批判・否定と戦後の民主主義的考え方、アメリカ的合理主義の浸透といった観念・イデオロギー状況、第三に住生活・住意識の保守性や受動性等によって、それらに限界や不十分さがあつたことも確かであろう。また、そうした理念の普及過程においては大量供給に対応した標準設計や商品化による記号化、規格化の問題があり、大衆化に伴う理念自体の理解・解釈の形式化、粗略化があつたのではないかと思われる。

それ故、上記の理念に基づく、或いは影響を受けた住宅が普及していく1960年代から今日に至るまで、様々な批判がなされてきたのである。その第一はリビングルームでの接客と関連したものである。これはある意味で当然の批判であつた。というのは、51C型等の食寝分離と就寝分離を重視した理念では、接客即ち、対社会コミュニケーションの問題は殆ど考慮されておらず、公私室型やモダンリビングでは、一方ではリビングルームを家族の集まり部屋と説き、他方では接客も家族のだんらんもそこで行くと説くといった理念上のあいまいさを持っていたからである。そして実際につくられてきたリビングルームの多くは、家族のだんらんも接客も行う場としては如何にも貧弱であつたからである。第二に、画一性や固定性への批判である。元々ここで対象としている住宅は小住宅であり、構成要素が単純であるわけだが、これに上記の標準設計という方法や商品化に対応した規格化という条件が加われば、画一化はある意味で当然であろう。近代の機械生産、大量生産のシステムの下では常にこの画一化の可能性は存在する。問題はこの画一性が住生活との対応で、しかも広い意味での住生活との対応でどれだけ問題とされているのかということであろう。画一性も含めてnLDKが様々な批判される中でも、西沢元衛が“やはり普通にはnLDKタイプが好まれます”（前掲「10+1」18号）と述べているように、依然として広く受容されているという現実をどうみるのかという問題である。この点では批判の対象となっている“画一性”の実態をもう少し具体的にとらえていく努力が必要であろう。

今日は、nLDKの元となつた51C型やモダンリビング等が提起された時代から相当隔っており、その間には住まいをめぐる諸条件も大きく変わった所があ

る。そのような変化を受けての批判が第三の閉鎖性への批判であり、第四の家族との関係からの批判である。確かに家族の生活や家族関係、地域社会、企業社会は大きく変化してきており、本来、住宅もその変化に対応すべきであろうが、一度築かれた空間は固定性、保守性を持っており、そう簡単には変えられず、日本人の住居・住生活に対する考え方にも保守性・受動性がある。それ故、この批判もある意味で必然性があり、当たっている所がある。ただ、1980年代の反子ども部屋キャンペーンや、近年の子どもや若者の凶悪な犯罪を、住居やそのプランと直接的に結びつけて批判するような短絡はやはり避けるべきであり、また、「近代家族を容れるハコとしてのnLDK」という、抽象的なイメージどうしをぶつけてnLDKの全否定に向かう単純な批判の仕方にも問題があると考える。住文化といったより広い視点や、具体的に住生活や家族関係をとらえ、そこから問題を論じていくといった態度がもっと必要ではないだろうか。

即ち、nLDKに対する批判は、(1) リビングルームでの接客と関連した批判、(2) 画一性への批判、(3) 閉鎖性への批判、(4) 家族との関係からの批判の4つに分類できるが、前二者は、nLDKの基礎となった51C型やモダンリビング、公私室型という戦後の住宅革新期に提起された理念自体が持っていた弱点や供給システムの性格に根ざしたものであり、後二者は、高度経済成長期以後の社会変化とnLDKとの矛盾・齟齬に根ざすものである。いずれにもそれなりの根拠があり、当たっている所も多い。そして、最も初期の頃から行われてきた接客絡みの批判が今日でも依然として行われていること等に示されるように、多くのnLDKが依然として弱点や問題点を抱えていることも確かであろう。ただ、nLDKという言葉が使われ出した90年代以降の批判の仕方は、家族絡みの批判に典型的に示されるような抽象的イメージが軸になって、結局抽象的にnLDKなるものを全否定してしまうような性格を強めているように思われる。むしろ今日のような大きな歴史的転換期にあつては、同様に大きな変化の時期であった1950年代になされたように、具体的に住生活を省みる中から現状のnLDKのあり方を批判するという方法がとられるべきでないだろうか。「はじめに」で述べたように、批判とは本来、対象をトータルに否定し去るものではなく、そこに含まれる肯定的側面を救い出しつつ、その批判的再構成を目指すべきものであろう。ハンナ・アーレントの公私論に依拠して言えば、人が生きていく上ではコミュニケーション活動とアイソレーション活動(具体的他者から離れること)の両方が必要だが、nLDKの

肯定的側面とは、公私室型という言葉が暗示するように、それが具体的他者と交流するためのコミュニケーション空間と一人になれるアイソレーション空間とから成るという点であろう。しかし、既に述べたような、nの閉鎖性への批判に示されるアイソレーション空間の問題やLDKの空洞化等と言われるコミュニケーション空間の問題が、現状のnLDKにあることは確かである。このような問題を具体的にとらえつつ、上記のような批判的再構成を考えていくということが、これからのnLDK批判に負わされた課題であろう。

参考文献

- 1) 「51C」 家族を容れるハコの戦後と現在 鈴木成文他、平凡社、2004年
- 2) 「公団アパートにおける公私両空間の分化について」 鈴木成文他、(「日本建築学会論文報告集」第69号、1961年)
- 3) 「建築計画学 6 集合住宅住戸」 鈴木成文、丸善、1971年
- 4) 「現代建築愚作論」 八田利也、彰国社、1961年
- 5) 「住宅の逆説 第三集」 黒沢隆、レオナルドの飛行機出版会、1977年
- 6) 「個室群住居」 黒沢隆、住まいの図書館出版局、1997年
- 7) 「モダン・リビング」 43号、1963年、婦人画報社
- 8) 「新建築」 1965年1月号、新建築社
- 9) 「家づくり」 1973年1月号、第一勧銀ハウジングセンター
- 10) 「新・3LDKの家族学」 宮脇檀、グロービュー社、1982年
- 11) 「モダン・リビング」 67号、1990年、婦人画報社
- 12) 「暮らしの手帖」 73号～76号、1998年、暮らしの手帖社
- 13) 「住生活学」 扇田信、朝倉書店、1978年
- 14) 「インテリアの計画と設計」 小原二郎他、彰国社、1986年
- 15) 「居間の家族学」 山田初江、グロービュー社、1984年
- 16) 「住まい方から住空間をデザインする」 林知子他、彰国社、1989年
- 17) 「マイホームプラン」 1993年7月号、マイホームプラン社
- 18) 「モダン・リビング」 1975年夏号、婦人画報社
- 19) 「ハウスプラン」 1978年1月号、産報
- 20) 「ニューハウス」 1984年1月号、ニューハウス出版
- 21) 「住宅画報」 1979年2月号、住宅新報社
- 22) 「モダン・リビング」 1984年特別号、婦人画報社
- 23) 「住宅金融月報」 1993年8月号、住宅金融普及協会
- 24) 「GA Japan」 35号、1998年、A.D.A.EDITA Tokyo
- 25) 「Esquire」 1999年12月号、エスクワイア・マガジン・ジャパン
- 26) 「西山文庫レター」 19号、2003年、西山文庫
- 27) 「10+1」 18号、1999年、INAX出版
- 28) 「建築雑誌」 1984年4月号、日本建築学会
- 29) 「建築雑誌」 1990年8月号、日本建築学会
- 30) 「家をつくって子を失う」 松田妙子、(財)住宅産業研修財団、1998年
- 31) 「住生活」 1984年1月号、住宅産業情報サービス
- 32) 「AERA」 1997年12月1月号、朝日新聞社
- 33) 「サンデー毎日」 1999年7月11日号、毎日新聞社
- 34) 「子供をゆがませる間取り」 横山彰人、情報センター出版局、2001年
- 35) 「家づくり」 1983年10月号、第一勧銀ハウジングセンター
- 36) 「住生活」 1984年4月号、住宅産業情報サービス
- 37) 「危ない間取り」 横山彰人、新潮社、2004年
- 38) 「孤の集住体」 渡辺真理他、住まいの図書館出版局、1998年
- 39) 「変わる家族と変わる住まい」 篠原聡子他、彰国社、2002年
- 40) 「借家と持ち家の文学史」 西川祐子、三省堂、1998年
- 41) 「住まいと家族をめぐる物語」 西川祐子、集英社、2004年
- 42) 「家族を容れるハコ 家族を超えるハコ」 上野千鶴子、平凡社、2002年
- 43) 「家をつくる」ということ 藤原智美、プレジデント社、1997年
- 44) 「家族を「する」家」 藤原智美、プレジデント社、2000年
- 45) 「建築雑誌」 1995年4月号、日本建築学会
- 46) 「家族・個人・社会と住まい」 日本建築学会建築計画委員会、1999年